

太田垣瑞一郎先生を偲んで

越河六郎（松蔭大学）

「桐原葆見の労働科学」研究会

研究会は、2000年11月の第1回から、2011年11月の29回まで続きました。研究会の趣旨は、桐原葆見先生（労働科学研究所・創立者の一人、わが国の産業心理学を体系化された）の高弟であった太田垣さんから、労研時代の桐原先生を話してもらう、ということでした。中身は桐原先生の「語録」「エピソード」などについてです。研究会というよりもまさに談話会でした。それでも、研究会の成果は「労働の生産性」（太田垣・越河編著、労働科学研究所出版部、2006年）としてまとめることができました。この本は桐原先生の論述集であって、そのなかから、「労働科学へのメッセージ」という形で「ことば」を選び出しています。

研究会は、太田垣さん84歳のときから始まっています。お歳のことも考えてお住まいのすぐ近くにある行きつけの蕎麦屋「福室庵」を会合の場とし、ここで20回の集まりを持ちました。畳の敷いてある上がり縁の席です。数名がやっと座れるぐらいの狭さですが、人数は少ないので間に合いました。フォーマルな研究会ではなく、“太田垣さんの話を聞きませんか”と声をかけて集まる、といった具合です。会の運営は私の同僚藤井亀さんがやってくれました。研究会の仕事としては結果的に「労働の生産性」（太田垣さんの命名）の編集ということになりましたが、実際は太田垣さんから、桐原さんの思い出や労働科学研究の体験談を聴くのが主でした。



写真 馬場房子氏撮影

柱上作業実験

太田垣さんご自身のエピソードとなると、こんな話もありました。高所作業の実験で被験者になったときの話です。高さ4.5メートルにもなる柱上での作業が生体にどのような負荷を伴うか、生化学的な反応・尿成分の変化から捉えようとした実験です。実験者は斉藤一氏（後の労研所長）。被験者は昇柱前にまず排尿します。そして、電信柱、所定の高さまで登り、安全ベルトで身体を支え、そこで首から下げた記録板を使って抹消作業などの課題に取り組みます。一定の時間が経過した時、排尿が求められるのですが、もちろん柱上でのことです。地上での排尿後30分そこそこしか経っていません。ふつう、尿意の起こる時間の長さでもありません。太田垣さんは排尿瓶に向かって、不安定な姿勢で試みましたが尿がでない。地上にいる斉藤さんに、“頑張っても出ませんよ”と訴えたそうです。ところが斉藤さん、少しも動じないで、“出るんです!”と強い口調で催促。このやり取りが何回かあって、斉藤さんから、“そうしたら、口をあけてごらん、出るから”と言われ、太田垣さん、いたしかたなく口をあけてやってみた。結果は、少量が出た。すぐ“できました”と報告。“そうでしょう、出るんですよ”。斉藤さん、ニンマリしたという滑稽譚です。被験者太田垣さん40歳近い頃の実験、その風景が彷彿されます。楽しそうに語っておられました。

ぼやき

太田垣さんは、あからさまに人を批判することはなさらなかったと思います。少なくとも私との会話の中ではそうでした。しかし「ぼやき」は時折ありました。

どんなぼやきだったかをひとつ紹介してみます。それは、疲労感評定尺度の一つ「作業後症候しらべ」（桐原・太田垣）に関してのものです。

「作業後症候調べ」の内容は、心身の症状、違和感に関する60項目の設問があり、それらは6特性に分類されています。すなわち、身体的症状、感覚的症状、神経的症状、観念的症状、意志的症状、情緒的症状ですが、しばらくして、これらの分類は因子分析等、多変量解析の手法を経ていないからハッキリしたものではないといった批判(?)がありました。これについての太田垣さんのぼやきです。“因子分析をかけないと、どうしてもだめなのかな”(当時、多変量解析手法の活用はそれほど進んでいませんでした)。“たしかに、質問紙への応答についての統計的解析は、質問項目の分類には格好の手がかりを与えてくれるが、その前に、研究者の考え方がより大事だと思うのだから”。

太田垣さんは、くちぐせに、一步でもよから桐原先生に近づきたいと言っておられました。それは研究上の事ではなく人間としての桐原先生です。その師を敬慕する情は、ご自分の随筆集『じぶくれ』に掲載された一文「学と遊」にもよくあらわれており。太田垣さんのお人柄が偲ばれます(じぶくれ、とは地面の膨らんでいるところのことで、こよくなされた山歩きの記録と、句集でもあります)。

「学と遊」

「工業中毒に関する研究では斯界の指導の地位にあった労働病理学者、故久保田重孝博士の学風を慕う数名が毎年御仏前に集い、奥方と語る一刻を過ごす、昨年の夏、床の間に我が師暉峻義等、桐原葆見博士に成る一幅を拝見した。是非写真に撮っておきたいと洩らしたところ、奥方から写真が届いた。両博士は労働科学研究所設立のとき(大正9年)から、生理衛生学(暉峻)心理学(桐原)を総合し、労働にメスを入れ、労働保護に立ち上がった同志である。労働科学のパイオニア両博士は互いに日向になり陰になって、研究所を我が国の労働衛生学、産業心理学のメッカにまで育て上げた」。

「暉峻は詩文と書を、桐原は絵画と書をよくした。孰れも極めて水準の高い藝であった。掛軸は、呆軒(当時の雅号)の描く壺と義等の讃である。私なりに読んでみよう。——『壺の讃…呆軒壺を好む。月給の餘分を以て購う所なり。其価常に円を出でず。高価の壺必ずしも気品有る無く、安価の壺必ずしも野卑にあらずなり。呆軒この哲理に立ちて広く凡百の壺を集む。年有れども惟然として一つの秀逸無し。彼即ち嘆息して曰く。生命短く藝術は長しと。茲に於いて呆軒この語を以て彼の座右の銘となすなり。義等生題』両先生とも30歳台の作かと推定している」。

「桐原研究室に長く同室した私だが、朝、先生より早く来室した日は数える程しかなかった。私が箒を持つと、“もう掃除はすませた。お茶でも飲みなさい”といって得意の茶碗を樂しげに撫でながら抹茶を点ててくれた。会合等で、興に乗れば色紙をものし、所望すれば呉れてやる。またよく画仙紙に『生命短し、業は長し』と、時にはラテン語で大書した。桐原先生の心情は暉峻先生題するところとは当然別なものであったろうが、暉峻の茶目振りを良しとし、暉峻は壺の絵を種に何と茶化そうと腹をたてるような仲間ではないと信じた微笑ましい合作である。“信は道の元、功德の母なり”を目のあたりにするようである。

世に詩歌、絵画などに才を発揮し、どちらが本業ともつかぬような例は多いが、両博士のそれは方しく遊びであった。趣味であった。結社に加わることなく、個展を催すことなく、作為そのものを楽しんでいるようであった、この遊びの精神が本業熟成の糧であったに相違ない。ここにヒューマニズム輝く、活力に満ちた学問の展開と主張の育つ機微が感じとられる」(1989、敦賀女子短大〈キャンパス〉12号)。

太田垣さんも、俳句をよくされました。「雪山をはなれて浮かぶ春の雲」。句集『稚児車』(精選作家叢書IX、本阿弥書店、2003年)があります。

(太田垣さん、と気安く“さん”づけで記しましたが、これは決して不遜な態度によるものではありません。先生、とは呼ばないでくれと言われていたからです。)

太田垣瑞一郎博士

1916年 兵庫県生まれ

慶応義塾大学名誉教授(文学博士)

(財)労働科学研究所客員研究員

日本応用心理学会名誉会員

2014年 逝去